信州中野のおいしいリンゴ

インタビュー×農家の皆さん

シナノピッコロ

## 荻原安治（おぎわらやすじ）さん（越）

# リンゴと一緒にいること―。それが何よりも幸せなことなんです

主に夫婦2人で「ふじ」、「秋映」、「シナノスイート」、「つがる」のほか「シナノゴールド」や「シナノピッコロ」など、さまざまな種類のリンゴを栽培しています。

高校の先生の勧めで、卒業後に山形県神町リンゴ研究所の故須藤明（すどうあきら）先生のもとで栽培技術を学びました。須藤先生には栽培技術だけでなく、人としての生き方など、今の自分の基礎を学ばせていただき、現在まで約50年間、この仕事をさせていただいています。

リンゴを通じて地域の方や恩師など色んな人と出会うことができたました。リンゴ栽培については、私自身、リンゴが心から大好きなので、苦になったことはないんですよ。

果物の「旬」は10日ほどしかないので、果物の産地にいる皆さんには、ぜひ、新鮮な取れたてのリンゴをたくさん食べていただきたいです。

▲リンゴ園からは中野市街地が一望できます

＜我が家のこだわり＞

現在、通常より収穫時期を遅くすることで、蜜が多く入った「冠雪ふじ」の栽培に取り組んでいます。冠雪ふじと認められるためには化学肥料を使わないなど、栽培方法にも条件があるので、まさにこだわりの一品だと思います。

奥さん曰く、「採算性より何より、ただ本当にリンゴが大好きな人なのよ」とのこと

＜我が家のこだわり＞

全ては整枝剪定から始まっていると思うので、良い枝を選び、良い花芽を残し、そうやって良いものだけを選んで出荷しています。また、新しい品種を入れるのではなく、園内で色付や味の良い木があれば、接ぎ木など行い、園内で選抜して「より良い物を残していること」もこだわりかもしれません。

シナノドルチェ

## 神田茂貞（かんだしげさだ）さん（上今井）

# 手を掛ければ掛けるほど、おいしくなって返ってくるんだよ

家族3人が主体となって「ふじ」、「秋映」、「シナノスイート」、「つがる」、「シナノドルチェ」のほか、自然災害にも対応できるよう、収穫時期をずらした桃やプラム、梨などを栽培しています。

親の代からリンゴ栽培をしており、土地を受け継いで19年になりますが、ふじの栽培は特に難しく、悩むこともあります。しかし、地域のリンゴ農家の仲間を通じて、剪定など作業方法を常に勉強し合い、仲間同士で技術力の向上に励んでいるため、意欲を高くして楽しく作業しています。

リンゴの食べ方としては、畑で「もぎたて」を食べていただくことが、本来の味以上においしく感じることができる方法ではないでしょうか。育てる土地によって味が変わる楽しみがあるので、ぜひリンゴの園地に遊びに来ていただければと思います。

▲作業小屋の脇には受粉用にツツハナ蜂の巣が

# インタビュー×「秋映」の産みの親

小田切健男（おたぎりたけお）さん（故人）の妻
## 小田切知江（おたぎりともえ）さん（一本木）

▲結実初めごろの秋映

## 人一倍の努力家が、独学で作り上げたリンゴ「秋映」

夫は、県の果樹研究会に入っており、昭和56年に会員自らが新品種の育成を一坪程度の園地から育成してみようという「実生一坪運動」がきっかけとなって、新品種の作成を始めました。

当時は、「早生のつがる」、「晩成のふじ」といって、その中間のリンゴがなく、味は抜群に良いが作るのが難しい「千秋」と、色・形共に良い「つがる」が自宅の畑にあったことから、良い部分を混ぜれば素晴らしいリンゴができるのではないかと考え、全て夫が独学で作っていました。

千秋とつがるを受粉をさせると、他の品種が混ざらないようにすぐに袋がけするなど細心の注意を払って育成していました。出来上がったリンゴ一個からは7粒程度しか種が取れず、次の年にプランターにまく際には100粒ほどの種からスタートしました。

育成を進めたものの、芽が出ない物もあり、出た物は選抜した上で、80カ所に高継ぎし、7年の歳月を経て、昭和63年に初めて結実することができました。初めてリンゴが結実した時は、毎日のように夫がリンゴ畑へ足を運び、「リンゴに色が入ってきた」など嬉しそうに話していたことを覚えています。

平成5年にやっと種苗登録ができた際には、「千秋よりもより良く、高社山の麓」という意味から名称を「高秋（こうしゅう）」と申請しました。しかし、先にほかの商品で登録されていたことから、夫が秋の紅葉がきれいな志賀の山を見ていて思いついた「色づきよく、秋の空に映える」という意味を込めた「秋映」という名前にすることにしました。

## 作っていただく方、食べていただく方全ての方へ「ありがとうございます」

▲実った秋映に前、知江さんと健男さん二人揃って。

## 秋映に関わる全ての皆さんに伝えたいこと

初めて秋映が種苗登録されたとき、まだどんなリンゴができるか分からない状況にも関わらず、交友関係のある農家の皆さんが率先して栽培していただいたことが、広く秋映が周知されるきっかけになったのだと思います。夫の人柄もあったかもしれませんが、皆さんに支えていただいたことに感謝したいです。

夫は、秋映が広く認知される直前に亡くなってしまったため、現在の状況を伝えられないのがとても残念ですが、土を耕し、苗を育て、花を咲かせて、実を付ける―。まるで人生そのもののような大好きなリンゴに関わることができ、とても幸せだったのではないかと思います。

生前、「いろんな人に作ってもらって、色んな人に食べてもらいたい」というのが口癖だったので、栽培していただいている方や食べていただいている方に「ありがとうございます」と伝えたいです。

秋映はそのまま食べてもおいしいですが、ジュースにして、そこに紅茶を入れると果汁100％のアップルティーになってお勧めです。食べ方は自由なので、これからも皆さんに秋映を食べ続けていただくことが私たち夫婦の幸せです。

▲今年も真っ赤に色付き収穫時期を迎えた「秋映」が秋の空に映えます